



図1 大宰府政庁と観世音寺

しての華やかさに包まれていた。

そうした歴史をもつ大宰府だが、時の流れとともにその歴史は忘れられ、「宰府詣り」の言葉が示すように、学問の神様菅原道真を祀る太宰府天満宮のある街として知られるようになった。ことに早春の太宰府は、太宰府天満宮に詣で入学試験の合格を祈願する人や梅の花を愛でる人が行き交う。天満宮に隣接して二〇〇五（平成十七）年に九州国立博物館が開館し、またそう広くもない市内に日本経済大学・福岡国際大学・筑紫女学園大学・九州情報大学など八つの大学・短期大学が設置されるなど、学問の街としての性格はいっそう強まっている。

太宰府天満宮の祭神菅原道真は、政敵左大臣藤原時平の讒言にあい、右大臣から大宰権帥に降格され、大宰府の南館で不本意な生涯を終える。そ

の経緯もあって、当初は怨霊をもつ怒れる雷神として恐れ敬われるが、学問の家に生まれ、自身当りきつての学者であったことから、次第に学問の神様として信仰されるようになってきた。その道真が失意の府南館で詠った「不出門」に「都府楼纔看瓦色 観音寺只聴鐘声」とある。都府楼すなわち大宰府政庁の堂舎は姿を消して今はもう見ることができないが、観世音寺の鐘は今でも聴くことができる。

移りゆく世のなかの歴史を刻み続けながら、観世音寺は絶えることなく現代へと伝えられてきた。そしてともすれば忘れられがちであった大宰府の歴史も、一九六八（昭和四十三）年にはじまり今に続く大宰府史跡の発掘調査によって再生されてきている。その最大の成果に、地表に礎石を遺している大宰府政庁跡は第三期のものであり、地下に第二期、さらに第一期が埋もれていることを明らかにしたことがある。第二期政庁は大宰府令の制定にともなって整備された段階とみられるから、その下層の第一期こそが白村江の敗戦後に急造された政庁になる。大宰府には第二期から基盤目状の計画都市である条坊制が本格的に施行されるが、第一期ですでに大宰府政庁中軸線と観世音寺中軸線は正しく五・五町の間隔をもっている。

観世音寺は朝倉橋 広庭 宮で薨じた母帝斉明天皇の追福を願って天智天皇が発願された由来をもっている。しかし、斉明天皇との所縁をもたない地で、しかも大宰府政庁と五・五町の間隔をもつて創建されたことの意味はわかっていない。最近、赤司善彦氏が第一期政庁こそが